

# ポスト共和主義パラダイム期の アメリカ革命史研究

## The Post-Republican Paradigm of the History of the American Revolution

鰐淵秀一

WANIBUCHI Shuichi

### 1. はじめに

本稿は、合衆国におけるアメリカ革命史研究の現在を理解するためのささやかな試みである。あらかじめ断っておく必要があるが、本稿は革命史研究の網羅的なサーヴェイを意図したものではない。他の分野と同様に、今日の革命史研究においても論文刊行数の増加と研究の多角化・細分化によって、分野の全体像を捉えることはますます困難になっている<sup>1</sup>。むしろ、本稿の狙いは、1990年代以降のアメリカ革命史研究の展開を概観した上で、現在に至る研究史上の重心の変化についての史学史的考察を行うことにある。その作業を行うために、1970年から1980年代にかけて隆盛を極めた「共和主義・自由主義論争」の直後の1990年代初頭から現在に至る時期を「ポスト共和主義パラダイム期」として位置づけ、革命史がその一部をなす初期アメリカ史の領域全体で1990年代前半を分水嶺として一種のパラダイム・シフトが生じたことを論じる。このパラダイム・シフトは、それ以前から進められていた「アイデンティティの政治」の影響を受けた研究動向に、大西洋史や大陸史といった広域圏アプローチの興隆が合流したことにより生じたが、この動きは現在もなお進行中である。こうした動向を踏まえて、初期アメリカ史という分野で生じているアメリカ革命の位置づけの変化と、新たなアプローチによって描かれつつある革命史の輪郭を見ていきたい。

## 2. Gordon S. Wood vs. *William and Mary Quarterly*

まず、合衆国の学界の今日の状況を反映するエピソードを紹介したい。2015年2月23日付の *Weekly Standard* 誌に寄せた書評の中で、アメリカ革命史研究の大家ゴードン・S・ウッドは初期アメリカ史研究の現状について以下のように嘆いた。

今日、初期アメリカ史の主要学術誌である *William and Mary Quarterly*（以下 WMQ）が掲載する論考は、16世紀植民地期ペルーにおけるメスティソや、革命後のモンリオールにおける家父長支配、トゥサン・ルヴェルチュールの前半生や16世紀カステリヤにおける奴隷といった内容に関するものだ。この学術誌はもはや合衆国の起源をもっぱら考究するものではなくなってしまった。歴史 GPS といった類のものが無ければ、迷子になってしまう恐れがあるような状況だ<sup>2</sup>。

このように名指しで WMQ に向けられたウッドの批判は、初期アメリカ史という分野の現状に対する不満の表明であった。彼によれば、この分野はかつてそうであったような「合衆国の起源」の探究、すなわち英領十三植民地の政治的独立から共和政に基づく立憲政体と連邦政府の創出、デモクラシーと政党政治の成立といった政治史を中心とするナショナル・ヒストリーを主体とするものではなくなってしまったのである。

このようなウッドの批判は根拠の無いものではない。例えば、2013年にオクスフォード大学出版局から刊行された『アメリカ革命ハンドブック』の編者エドワード・グレイとジェーン・カメンスキはウッドよりも一世代下であるが、「北米前近代の研究者は、合衆国の起源からより広大な大西洋世界や [北米] 大陸の探究へと関心を移している」と認め、ウッドとは対照的に肯定的なトーンで「アメリカの起源物語には新しい空間や物語が必要である」と述べている<sup>3</sup>。両者による研究動向をめぐる認識の一致とそれに対する態度の相違は、分野の現状に対する世代間のギャップを示すものと言えよう。

しかし、話はこれで幕引きではなかった。ウッドによる批判の翌年、WMQの編集を務めるジョシュア・パイカーが、雑誌の発行元であるオモハンドロ初期アメリカ研究所 (OIEAHC) の公式ブログにおいて、ウッドへ

の反論を展開したのである。パイカーは、先に引用した書評の文章を取り上げ、地理的には英領十三植民地に住み、人種的には白人である植民者を中心に初期アメリカ史を限定的に捉えることを良しとするウッドを痛烈に批判した。彼いわく、ウッドのような「初期アメリカ史へのアプローチは形容し難い。完全にそうだというわけではないが、視野狭窄だ。排他的とまではいえないが、自民族中心的だ。およそ、支離滅裂かつ恣意的で、ウッド自身が好む「合衆国の起源」という観点から見ても自滅的に思える。」さらに、“Getting Lost”と題されたこのポストにおいて、パイカーは初期アメリカ史研究者に広大な大西洋世界や北米大陸へと踏み出し、「迷子になること」を推奨したのである<sup>4</sup>。ここにおいて、「合衆国の起源」を探求するナショナル・ヒストリーを奉じるウッドに対して、現体制のWMQははっきりとアンチテーゼを打ち出したのである。

さらに、この文脈において注目すべきは、ウッドが同年9月6日付のニューヨーク・タイムズ紙に寄稿したアラン・テイラーによるアメリカ革命史の通史的著作『複数のアメリカ革命』への書評である。その末尾でウッドは以下のように批判する。

テイラーの結論によれば、革命の主要な遺産は、中産階級の平凡な白人男性が支配する社会が出現したことであった。彼らは家父長的、人種差別的、殺戮的だとして、テイラーが批判してやまない人々である。その勝利は、他の人々の犠牲の上に招来したと彼は考えているようである。彼いわく、一般の白人男性を優遇することで、革命は黒人、先住民、女性には不利に作用したという。テイラーの著作は一つの疑問を提起する。このように下劣で人種差別的、分断的と見なされる革命は国民のインスピレーションになり得るのだろうか<sup>5</sup>。

二度のピューリッツァー賞受賞歴を持つ歴史家テイラーは、WMQと*Journal of the Early Republic*誌合同の2018年の革命特集号でも主幹を務め、今日の初期アメリカ史研究者の間で最も尊敬を集める人物と言っても過言ではないが、アメリカ革命の評価をめぐる両者の対立の構図は鮮明である<sup>6</sup>。ここでの焦点は、アメリカ革命の帰結そのものの評価のみならず、ウッドとテイラーの双方が革命の主体と見なす中産階級白人男性に対する評価である。後

述するように、ウッドにとっては彼らこそがアメリカのデモクラシーの推進力である一方で、テイラーは彼らの躍進の影で抑圧され犠牲となった人々の存在を強調する。

ゴードン・S・ウッドをめぐる以上のエピソードは、彼自身の保守化と捉えることもできよう（*Weekly Standard* 誌は2018年に廃刊したが、ウィリアム・クリストルらによるネオコン系保守オピニオン誌として知られた）。しかし、かねてからの若い世代の初期アメリカ史研究者の間に見られたウッドに対する批判や反感を考える時<sup>7</sup>、ウッド対WMQ、そしてウッド対テイラーという構図の背景には、権威ある老大家の保守化という以上に、この分野で1990年代以降に生じた二つの動向をめぐる対立があると考えられる。その二つの動向とは、「アイデンティティの政治」を背景とする女性史や先住民史、黒人史研究の進展による革命の担い手としての主体の多様化と、大西洋史や大陸史、グローバル史といった空間論的転回の結果生じた初期アメリカという時空間の拡張および再編である。この研究史上の大きな二つの潮流は重なり合いながら、アメリカ革命の意味や輪郭を大きく変化させていくこととなった。彼の引用文からも察せられるように、ウッドの不満はこの二つの動向に向けられていると言ってよいだろう。次節では、この動向がどのように分野に浸透していったのか、1990年代初頭に遡って見ていきたい。

### 3. 共和主義パラダイムの崩壊と初期アメリカ史の変容

20世紀後半のアメリカ革命史研究の焦点となったのは、バーナード・ベイリンやゴードン・ウッドによる共和主義思想の研究を契機とする「共和主義・自由主義論争」であった。1960年代に従来の自由主義コンセンサスに対する挑戦として開始された共和主義解釈をめぐる動向は、革命期の政治思想の解釈をめぐる論争にとどまらず、18世紀から19世紀前半にかけての社会史や女性史、南部史といった広範な領域に影響を及ぼした。ここでその詳細を論じる余裕は無いが、リンダ・カーバーによる「共和国の母」論やショーン・ウィレンツが見出した「職人共和主義」を想起するだけで、その影響力は十分に感知できるだろう。思想史家ダニエル・T・ロジャーズが論じたよ

うに、共和主義解釈は、1980年代までにそれ以前のビアード的革新主義パラダイムやハーツの自由主義パラダイムを包摂し、アメリカ近代史を包括的に解釈するための有力なパラダイムを形成した<sup>8</sup>。

この時期、アメリカ革命史の「共和主義的総合」を目指す運動の中心と目されていたのが、バイリンやJ・G・A・ポコックと並ぶ共和主義解釈の立役者の一人であるウッドであった。寡作と見なされていた彼が、1992年に満を持して世に問うたのが『アメリカ革命の急進性』であった。この著作で、彼はアメリカ革命がフランス革命に匹敵する社会革命であり、革命がもたらしたインパクトによってアメリカの政治文化が、植民地時代の王政主義的統治から革命期の少数のエリートが指導する共和主義を経て、共和国初期の多数者の参加によるデモクラシーへとラディカルに変容したことを論じた。それは、「現実とレトリック」、すなわち社会経済的構造と理念や言説のどちらが革命の推進力であったのかという一世紀に及ぶ革新主義解釈とホイッグ解釈の史学史的対立と、ホイッグ解釈内部における共和主義解釈と自由主義解釈の対立の両者を止揚すべく企図された。この大著を通じて、ウッドは1970年代の社会史研究の隆盛以来、その必要性が叫ばれていたアメリカ革命史を総合するナラティブを提出したのであった<sup>9</sup>。

共和主義パラダイムの完成を意図したウッドの著作は、しかし、刊行直後から激しい批判に晒された。それを端的に示すのが、この著作をめぐる1993年のアメリカ史学会(OAH)年次大会でのセッションを記録したWMQ誌上のフォーラムである。そこではジョイス・アプルビーやマイケル・ザッカーマンといった同世代の歴史家が、彼の著作への批判を展開した。批判の核心にあったのは同書が提示した総合の不十分さや限界の指摘であった。パネリストの一人バーバラ・クラーク・スミスは、当時最も抑圧された人々、すなわち女性や黒人奴隷の地位に変化をもたらさなかった革命のどこが急進的であるのかと疑問を呈し、ザッカーマンはウッドの描く革命期アメリカを、エリートの言説に依拠した従来の歴史記述と何ら変わらない、北東部の裕福な白人男性によって描かれたきわめて同質的な社会像に過ぎないと断じた。彼によれば、ウッドは前世代の革新的な研究者たちが取り組んだ階級や人種、ジェンダー、エスニシティといった問題を等閑視し、社会内部の

対立を捨象してしまった。「本書は多様な民主主義を賛美し、闘争なき平等を称揚している<sup>10</sup>。」

こうした批判が現時点から見て重要であるのは、それが今日まで続く研究動向を予告するものであったからだ。この時期以降、批判に呼応するかのようになり、ウッドや彼より上の世代が取り組んだホイッグ解釈と革新主義解釈との対立や自由主義と共和主義との対立という歴史解釈の枠組みを超えた、多様なテーマや視角による研究が陸続と登場する。それを象徴的に示すのが、ウッドの著作をめぐるフォーラムの前年に *WMQ* が同誌の 50 周年を期して企画した「初期アメリカ史の未来」と題したフォーラムである。この特集では、社会史や人口史、農業史、思想史といった従来の分野に加えて、アフリカ系アメリカ人史、先住民史、ジェンダー史といった、初期アメリカ史ではそれまで必ずしも中心的に扱われてこなかった分野に光が当てられた。さらに、このフォーラムを特徴付けたのは、当時の人文社会科学全般に大きな影響を及ぼした文化理論のインパクトであった。例えば、キャスリン・M・ブラウンのエッセイが示すように、1970 年代にリンダ・カーバーやメアリ・ベス・ノートンによって基礎が固められた革命期の女性史にもジェンダーの視角が導入され、人種とジェンダーの交錯やセクシュアリティの問題が 1990 年代以降の潮流を形づくることになった<sup>11</sup>。このように、1990 年代前半は共和主義がパラダイムとしての訴求力を喪失し、新たな方向性の模索が開始された画期となった。

また、このフォーラムで注目されるのは、ダニエル・K・リクターによる先住民史をめぐるエッセイである。彼は 1970 年代にフランシス・ジェニングスやジェームズ・アクステルらによって開拓された「新しい先住民史」の達成や課題を論じる一方で、こうした新しい研究がヨーロッパ中心な初期アメリカ史の主流に十分に受け入れられていない現状について強い懸念を表明していた<sup>12</sup>。しかし、先住民史やボーダーランド史が隆盛を極める今日から見て、彼の懸念が杞憂に過ぎなかったことは明らかである。現代の初期先住民史研究の古典とされるリチャード・ホワイトの『ミドル・グラウンド』は 1991 年に刊行されていたし、エドワード・カントリマンやアラン・テイラー、そしてリクター自身らの業績によって、もはや先住民不在の初期

アメリカ史を記述することは不可能であると今日の研究者たちは同意している<sup>13</sup>。ジェンダー史や黒人史についても同様であるが、1990年代以降の初期アメリカ史において主体の多様化が顕著に進められた結果、ウッズのそのような白人男性のみに焦点を当てた歴史像は、今日の研究者にはもはや支持され得ないものとなっている。

こうした主体の多様化の一方で、1990年代は大西洋史の登場をはじめとする初期アメリカ史の空間的再編成が進められた時期でもあった。今日、大西洋史については邦語でも多くの紹介や研究成果があるため、ここで詳細を論じる必要は無いが、大西洋史の分野としての構築と制度化において最も功績のあった人物がバーナード・ベイリンであることは論を俟たない。1967年に『アメリカ革命のイデオロギー的起源』を発表し、共和主義解釈を打ち立てたベイリンは、1980年代にそれまでの文書史料を中心とした政治史研究から当時最新のコンピュータ技術によるデータ分析を駆使した移民史研究へと力点を移し、ハーヴァード大学の指導教員であったオスカー・ハンドリンの衣鉢を継いで「英領北アメリカへの移住」プロジェクトを組織していた。その延長線上に、1995年から大西洋史セミナーを主催し、10年以上続いたセミナーを通じて大西洋史を初期アメリカ史の中心へと引き上げたのであった。「いまや私たちはみな大西洋史家である（“We are all Atlanticists now”）」というデイヴィッド・アーミティージのよく知られる発言は2002年になされたものであった<sup>14</sup>。

こうした運動の国際的認知や、近世のアフリカ、ラテンアメリカ、西ヨーロッパを包含する広域圏史であるという主導者たちのアピールも手伝って、大西洋史はナショナル・ヒストリーの枠組みを超えるトランスナショナルあるいはグローバルな歴史枠組みの先駆と見なされることも多い。ベイリン自身、大西洋史の成立の背景にあった「歴史観の変化は本質的に空間的なものであった（“The shift in historical perspective was essentially spatial”）」と述懐している<sup>15</sup>。しかし、他方でこの運動は初期アメリカ史の空間的拡張という帝国主義的側面を強く有したものであった。WMQの最近10年分の論文タイトルを見れば気がつくように、今日の初期アメリカは、まさにウッズが嘆いたように、合衆国として独立する英領十三植民地を超えて、例えば

ジャマイカのプランテーションやギニア湾の奴隷商館、ニューファンドランドの海賊町をも含む広域空間を意味するようになっていく。

同様に、初期アメリカ史の空間的再編成を進めたのが、近年「大陸史 (Continental history)」と総称されるアプローチである。これは先に触れた先住民史とボーダーランド史の飛躍的な進展によって、従来の研究では注目されてこなかった初期のアパラチア山脈以西の北米大陸の中心部が研究上のホットスポットとなったことを指す動向である。五大湖地方における英仏の両帝国と先住民諸部族の共存を主題とした先述のホワイトの『ミドル・グラウンド』を嚆矢として、アラン・テイラーやエリック・ハインドレイカーらはニューヨーク北部やオハイオ渓谷を舞台とする先住民と植民者、帝国と合衆国の交渉史を描き、西部ボーダーランドの歴史を刷新した。2000年代には初期アメリカ史研究における西部への重心移動はさらに進み、キャスリン・デュバルは16世紀から19世紀初頭まで先住民がヨーロッパ人に対して優位を保った「ネイティブ・グラウンド」であったアーカンソー渓谷へと、ペッカ・ハマライネンは18世紀を通じてコマンチ族が融通無碍の大帝国を築いた現在のニューメキシコを中心とする南西部へと初期アメリカ世界の拡張を進めた。このように、現在の初期アメリカ世界は大西洋海域のみならず、同時代のヨーロッパ系植民者に「インディアン」の国」として認識されていたアパラチア山脈以西の北米大陸のほぼ全域を包含するものとなった<sup>16</sup>。

このように、1990年代から2000年代にかけて初期アメリカ史研究は、それまでのナショナル・ヒストリーの枠組みに基づく英領十三植民地の白人男性を中心とする政治史や社会経済史、思想史の探究から、大西洋海域から西部の先住民世界にまで拡張した広域空間における多様な主体の生きられた経験を再構成する知的営為へと大きな変貌を遂げた。このような変化をもたらしたのは、第一に1960年代以降の「アイデンティティの政治」に基づく女性史や黒人史、先住民史の進展であり、第二にナショナル・ヒストリーからトランスナショナルな歴史学への空間論的転回であった。この研究視角の変容を経た現在から見る時、1992年にウッドが提示した初期アメリカ史像は歴史的主体の面でも空間の面でもきわめて限定的なものであり、その変化の胎動は1992年の時点ですでに始まっていた。歴史的主体と空間を中心とす



る初期アメリカ史研究の重心移動は一種のパラダイム・シフトであると考えられるが、いまだにその変化の規模に相応しい名称を得ていないのである。

しかし、近年こうした動向に名前を与えようとする試みも始まっている。2016年、OIEAHCのカロリン・ウルフがTwitter上で“#VastEarlyAmerica”というハッシュタグを用いて、WMQが進める広域的な初期アメリカ世界の探究という方向性に名称を与えた。ウルフはTwitterやブログを通じてこの名称の普及に努め、現在この名称はWMQの方向を示す言葉として定着した感がある。彼女は2019年にスミソニアン協会の発行する雑誌*Humanities*に「広大な初期アメリカ：複雑な現実のための三つのシンプルな単語」と題した論考を寄稿し、その基本的なコンセプトを解説している。彼女自身の説明に耳を傾けてみたい。

これらの新しいアメリカ史記述は、動的かつ多言語で、グローバルに接続された、そして時に暴力的な複数の社会が一つに収斂していく過程についての広がりのある視座を提示している。その目的は、これらの諸社会の中で意味を見出し、作り出した人々の日常生活とそれらの強い結びつきへの深い理解を生み出すことにある。初期アメリカの地理的拡張は、大西洋ととりわけカリブ海域の文脈を組み込んだ、より包括的な北アメリカの物語を私たちに提示する。アメリカ国民の前史や初期の歴史を構成する概念枠組みを拡張し、新たな文書史料や方法論を分析することで、私たちは活力ある広大な初期アメリカを正しく理解できるようになる。その初期アメリカは「アメリカ史の」基層をなすと同時により個別的でより複雑である<sup>17</sup>。

ウルフによる「#広大な初期アメリカ」のコンセプトは、まさに「アイデンティティの政治」が見出し、大西洋史や大陸史によって拡張された領域に生きた多様な人々の経験を包含しようとするものである。このハッシュタグは新たなパラダイムを指し示す言葉となるのだろうか。

#### 4. 新しい革命史像の模索

前節で見た初期アメリカ史の重心移動は、アメリカ革命史研究にどのようなインパクトをもたらしたのだろうか。近年、アメリカ革命史研究の史学的考察に精力的に取り組むデイヴィッド・ワルドストライカーは、こうした

研究史上の変化をホイッグ解釈・革新主義解釈・帝国学派的解釈という革命史研究の三つの潮流が交互に交代を繰り返すサイクル理論によって説明する。すなわち、三つの潮流はそれぞれ20世紀前半に登場して解釈上の優位を競ったが、戦後、自由主義解釈や共和主義解釈の形を取ってネオ・ホイッグが、ニューレフト史学や社会史学の形を取ってネオ・プログレッシブ（新革新主義解釈）が台頭すると、両者の対立と対話の時代が続いた。この両者の時代が終わりを告げた後、1990年代から現在に至るまで大西洋史や大陸史という形を取って新たな帝国学派的解釈が優位に立ちパラダイムを形成したという<sup>18</sup>。実際、OIEAHCのカリン・ウルフが「#広大な初期アメリカ」の知的先駆者として、WMQの創刊者の一人であると同時に戦前の帝国学派的の総帥であったチャールズ・M・アンドリュースを挙げているように、この史学史上のサイクル理論には一定の説得力がある<sup>19</sup>。

しかし、これまで論じてきたように、「アイデンティティの政治」による多様な主体の復権という潮流を考慮する時、ワールドストライカーが主張する帝国学派的解釈の一元的優位という見立ては一面的であるように思える。ウッズの嘆きの中でも、テイラーやウルフが示す新しい視座においても、白人男性に限定されない初期アメリカ世界に生きる多様な主体は、大西洋世界や北米大陸という空間と並ぶ議論の焦点であったはずである。事実、アルフレッド・ヤングとグレゴリー・ノーブル、アラン・ジブソンといった論者の史学史理解において、2000年代の動向として注目されているのは大西洋史や大陸史といったアプローチよりも、抑圧された人々に焦点を当てるネオ・プログレッシブの台頭であった<sup>20</sup>。それがどのように呼ばれるとしても、今日の革命史研究のパラダイムを形づくっているのはネオ・プログレッシブとネオ・帝国学派的解釈の混合体であり、両者の連合がウッズらネオ・ホイッグを圧倒しているという構図である。このようなメタ歴史学的な視座の有効性については議論の余地があるが、この枠組みを念頭に置いた上で革命史研究の展開を振り返ってみたい。

ここでウッズの著作に立ち戻ると、刊行当初から大きな批判を浴びたにもかかわらず、『アメリカ革命の急進性』の革命史研究への貢献は、革命期を扱う政治史の主戦場を思想史から政治文化論へと移行させたことにあった。

それは政治思想史から出発したウッドが長年にわたる革新主義史学や社会史学との対話を通じて、エリートの言説のみならず、民衆も含めた社会全体の思考様式や慣習としての政治文化の探究へと至ったためであった。もちろん、政治文化論への移行は、ウッド個人の達成というよりも、歴史学全般において1970年代の政治行動論や1980年代のカルチュラル・ターンの影響の下で生じた展開でもあった。しかし、共和主義解釈をベースとして、革命後の社会における（白人男性の）民衆を主体とするデモクラシーの成立を論じた『急進性』は、1990年代以降の研究に一定の方向性を与えることになった<sup>21</sup>。

革命史研究の分野において、1990年代から2000年代は政治文化論が花開いた時期であった。すなわち、ワルドストライカーやサイモン・P・ニューマンのような世代の歴史家たちは、革命期のパレードやデモ行進のような街頭政治に着目すると同時に、当時英訳がなされたばかりのユルゲン・ハーバーマスの公共圏論に影響を受けて印刷文化を政治史に組み込み、ウッドのそれとは異なる理論的洗練を備えた政治文化論を展開した。彼らは、独立運動から憲法制定論争、さらに政党政治の進展といった政治的運動を通じて、街頭政治や印刷文化がデモクラシーを活性化させたことを史料と理論を駆使して論じたのである。さらに、カルチュラル・ターンの洗礼を受けた歴史家たちは、ジェンダーの視角を政治史に導入することで街頭政治のような広義の政治における女性の役割を発見するとともに、狭義の政治の領域の中に名誉や徳といったジェンダー化された言説が機能したことを明らかにした。公共圏や政治的言説における情念（passion）や感性（sensitivity）の役割に対する着目も、政治とジェンダーの関係の考察から導き出されたものであった。同様に、政治とジェンダーの結びつきは、消費や物質文化の領域にも見出された。ローレル・サッチャー・ウルリクやT・H・グリーンの研究は、衣服や茶器といった日用品にまつわる消費文化が、いかに独立運動と結びついていたかを示している<sup>22</sup>。

しかし、現時点から見て、革命期の政治文化史は多くの優れた成果を生み出したものの、それ自体が新たなパラダイムを形成したわけではなかった。むしろ、新しい革命史の可能性は、先に見た初期アメリカ史における主体と空間の問い直しから出発し、白人男性中心のナショナルな枠組みに囚われた

既存の革命のナラティブを相対化する動きの中にこそ見出されることになった。主体の面で新たな研究の局面を切り開いたのは、ネオ・プログレッシブの筆頭と見なされているウッディ・ホルトンの『強いられた建国者たち』である。彼は、なぜ広大なプランテーションを所有するヴァージニアのジェントリたちが独立を主導したのかという古典的な問いに対して斬新な解釈を提示する。ホルトンによれば、イギリス本国議会による課税政策や植民地の抵抗運動やボイコットによって度重なる不況や経済的混乱が続いた結果、ヴァージニアの小農や奴隷、周辺の先住民集団の不満から騒擾や反乱が頻発し、支配層はその社会的混乱を鎮める最後の手段として独立を選択することを余儀なくされたという。「強いられた」というタイトルからも読み取れるように、ヴァージニアのジェントリを独立へと駆り立てたのは、これまでの解釈が論じたような自由の追求や西部の土地の利益といった彼ら自身の自発的な欲求ではなく、奴隷や先住民の反乱という民衆の主体的行動であった。彼は、植民地社会の周縁の人々の主体性を革命の駆動力として提示したのである<sup>23</sup>。

こうした動向の中で見出されたのが、女性や黒人奴隷のようなこれまで政治的主体と見なされなかった人々が革命において果たした役割であった。先に見た政治文化史は広義の政治における女性の役割を発見したが、女性たちは独立戦争において大陸軍・国王軍両軍のサポートを行うと同時に、本国への抵抗運動や憲法批准論争においてもボイコットや街頭行動を通じて積極的に参加していたことが明らかにされている。ローズマリー・ザガーリによれば、革命の大義は女性たちの政治参加を正当化し、女性たちは実際に街頭政治を通じて政党政治や選挙運動に参加し、ニュージャージーでは一時期ではあるが選挙権を持つに至った<sup>24</sup>。革命の中で黒人奴隷が発揮した主体性についても、現在の研究は多くを明らかにしてきた。1775年11月のヴァージニア総督ダンモア卿による布告に対して解放を夢見た多くの黒人奴隷が国王軍に参加したことはよく知られている。植民地時代から革命期の奴隷制に関するスタンダードとして邦訳もあるアイラ・バーリンの著作でも、革命期に黒人奴隷が自由を獲得するために主体的に行動を起こしたことを強調している。とりわけ、今日の研究が注目するのは革命期やその後の奴隷反乱や英国軍への参加といった黒人の行動とその政治的・社会的インパクトである<sup>25</sup>。

この中で、先住民史研究は主体性の復権と空間の拡張という二つの潮流が合流する分野として今日特権的な地位を占めると言ってもよい。コリン・キャロウェイの1995年の著作『インディアンの国におけるアメリカ革命』を嚆矢として、革命期の先住民の経験については多くの研究が積み重ねられている。前節で触れたホワイトやテイラーらの研究とともに、例えばパトリック・グリフィンの『アメリカのリヴァイアサン』では、オハイオ渓谷のような先住民と植民者が共存した境域地域では、革命はより暴力的な色彩を帯びたことが指摘されている。革命により解き放たれた白人入植者の土地への欲求は、すでに大西洋沿岸部から中西部へと移住していた先住民諸集団との軋轢を増大させ、彼らの土地からの放逐をさらに促進した。無法の暴力地帯と化した地域に秩序がもたらされるには、連邦政府の成立を待たなければならなかった。そして、近年のデュバルやサウントの研究は、革命のインパクトがオハイオ渓谷やニューヨーク北部のような18世紀後半の英仏米の地政学的焦点であった地域のみならず、フロリダやカリフォルニアのような北米大陸の周縁部にまで及んだことを描き出している。このように先住民と彼らの生きた地理的空間への着目は、革命の舞台を西へ西へと押し広げ、そこでは北東部や南部で進展していたイギリス本国への抵抗運動とは全く異なる、先住民と植民者の関係に英仏の帝国の思惑が重なった、暴力を基調とした世界が革命により出現したことを明らかにしたのである<sup>26</sup>。

大陸史の観点から見た主体と空間の再構成の一方で、初期アメリカ史研究における大西洋史やグローバル史の流行は、アメリカ革命を一国史的枠組みから解放し、環大西洋革命論やよりグローバルな「革命の時代」という文脈に置き直すことを促した。イリジャ・グールドやアーミテイジらは、合衆国やフランス、ハイチ、そして中南米における諸革命の相互連関や影響関係に着目して、その「絡みあった歴史」を描きだすことを提唱した。ピーター・ラインボーとマークス・レディカーによる革命期の大西洋世界におけるマルチエスニックなアンダークラスの連帯についての研究も、こうした動向に位置づけられるだろう。また、リン・ハントやジョナサン・イズラエルらの近年の研究は、人権や民主主義といった近代的理念がヨーロッパを超えた大西洋世界のグローバルな連関の中で形成され、革命の時代にアメリカ革命を嚆

矢として各地に普及していくプロセスを描いた。一連の研究はR・R・パーマーの環大西洋革命論のリバイバルを呼び起こしたが、同時にパーマーがその大著においてハイチの黒人革命を取り上げなかったことに対する批判は、主体と空間の両者が問い直されている現在の動向を反映していると言えよう。革命期のハイチや西インド諸島は今日大きな注目を集めているが、そこに黒人奴隷の主体性ととともに、アメリカ革命やフランス革命の特権的地位や例外主義的傾向を相対化する契機が求められているからだろう<sup>27</sup>。

同時に、大西洋世界を超えて、よりグローバルな文脈や国際関係の中でアメリカ革命を理解しようとする動きもある。邦訳もなされたアーミテイジによる独立宣言のグローバル史やグールドによるアメリカ独立をヨーロッパ国際関係の文脈の中で論じた研究は、革命による合衆国の国家形成という歴史的現象を、従来のアメリカ国民を主体とする建国物語としてではなく、近世の主権国家体制や国際法体系の中で諸外国との交渉を通じて合衆国という主権国家が成立する経緯を描き出している。このような観点から書かれたグローバル史は、アメリカ革命史を一国史的枠組みや例外主義から解放するための効果的なアプローチとして機能すると言えよう<sup>28</sup>。

以上に見た主体と空間の再編を経て、研究者たちは革命の性格そのものを既存のイメージとは異なるものとして捉え始めている。例えば、2013年にフィラデルフィアで開催された大規模なカンファレンス「アメリカ革命の再生」で強調されたのは、グローバルな視点とともにアメリカ革命を内戦として捉える視点であった。イギリス本国の課税に対してアメリカ人が一丸となって独立戦争を戦い抜き、連邦共和国として国家と国民を形成するというナショナリスト的ナラティブから離れて、革命のプロセスを反英闘争における愛国派と王党派との抗争や、独立戦争における独立派の大陸軍と国王軍・王党派の連合軍との対立として描く時、それはイギリス帝国の辺境で起こった内戦として理解される。同時に、それは様々なアメリカ人が独立派と王党派に分かれて戦った内戦でもあった。黒人奴隷は国王軍に参加して独立派の奴隷主と戦い、その一人ジョージ・ワシントンの率いる大陸軍は国王軍と同盟した先住民諸部族と戦ったのである<sup>29</sup>。

内戦としての革命という理解は、アメリカ革命の暴力性を強調する一連の

研究とも共振関係にある。西部フロンティア地域における革命は先住民と植民者の間の暴力的な衝突に彩られていたし、大西洋岸でも愛国派による王党派へのリンチや強制財産没収、イギリス兵やドイツ傭兵による都市や農家での略奪やレイプが横行したことが知られている。ハンナ・アレントの革命観に顕著なように、従来アメリカ革命は暴力とテロルに満ちたフランス革命と対比され、穏健で理性的に進められた革命として理解されてきた。革命を暴力的内戦として描く近年の研究は、いずれもこうした神話的革命観に否定的である<sup>30</sup>。

以上のように、アメリカ革命を本国に対する十三植民地の独立戦争ではなく、北米大陸の各地で展開した諸勢力の内戦とその結果グローバルな国際関係に登場した新生の主権国家の成立として捉える時、従来の革命理解を支えていたナラティブそのものが大きな変更を迫られることになる。そこでは、自由やデモクラシーの拡大というホイッグ解釈が提示した進歩的ナラティブは成立し得ない。革命によるアメリカ共和国の成立がもたらしたものは、大西洋世界や北米大陸における国際秩序の変容とその広大な地域の各地の社会内部における人種的・ジェンダー的・階級的秩序の再編であった。この広範な社会秩序の再編は地域によって異なった形を取った。そして、それはある集団にとっては自由の拡大を意味したが、それ以外の集団にとっては差別や抑圧の増大を意味することになった。このような革命理解が、この論考の冒頭で触れたグレイとカメンスキの言う「アメリカの起源物語の新しい空間や物語」や、ウッドが批判したテイラーの『複数のアメリカ革命』が提示するナラティブの前提となっている。今日、ネオ・ホイッグの筆頭たるウッドがこのようなナラティブに反発するのはやむを得ないであろう。パラダイムが変化した結果、革命のナラティブもまた異なるものへと変化したのである。

## 5. おわりに

革命史研究のなかでもとりわけ保守的な性格が強いサブジャンルとして建国の父祖研究がある。フランクリン、ジェファソン、アダムズら建国の父祖の伝記記述には長い伝統があるが、とりわけ21世紀に入り「当世風建国者

伝 (Founders Chic)」と呼ばれる、建国の父祖の人間性やリーダーシップを現代の読者にわかりやすく提示する一連の伝記作品が一般読者の間でベストセラーとなる現象が起こっている<sup>31</sup>。こうしたごく一握りの白人指導者の伝記が人気を集める現状は、今日の研究者の関心とは極めて対照的である。実際、近年は研究者による新しい視点で書かれた建国の父祖研究も多く書かれている。ジョン・アダムズの夫人アビゲイルが女性ながら土地投機家として主体的にビジネスに関与していたことを明らかにして、従来のイメージを覆す人物像を提示したウッディ・ホルトンによる伝記研究や、トマス・ジェファソンと彼の所有した女奴隷サリー・ヘミングスおよび彼らの子孫に光を当てたアネット・ゴードン＝リードの著作はそのごく一部である<sup>32</sup>。しかし、より多くの一般読者の支持を得ているのは、学術的関心に基づいて建国者に新たな光をあてる研究よりも、デイヴィッド・マックロウやジョン・ミーチャムのような作家による「当世風建国者伝」型の著作である。

しかし、こうした対立を超えて新しい革命史像を一躍ポピュラーにしてしまったのが、リン・マニエル・ミランダによる2015年1月公開のブロードウェイ・ミュージカル『ハミルトン』である。このミュージカルは「当世風建国者伝」ジャンルの作品と見なされるロン・チャーナウのアレグザンダー・ハミルトン伝を原作としているが、その特徴はヒップホップの音楽に乗せてオール非白人のキャストによる建国の父祖の物語を描いたことにある。とりわけ、西インド諸島ネイヴィス出身のニュー Yorker であるハミルトンを演じたのはプエルト・リコ系二世にあたる製作者のミランダ自身であり、そこには今日のアメリカ社会の多様性を投影しようとする明確な意図が見られる。2016年11月19日、副大統領への当選が確定した直後に作品を観劇したマイク・ペンスに対して、ミランダらは以下のように語りかけた。

私たちは多様性のアメリカそのものです。あなた方の新しい政権が私たち自身や私たちの惑星、子供達、親達を保護し、譲渡不可能な諸権利を守ってくれるのか、と不安を感じております。このショーが私たちのアメリカ的価値を維持し、私たち全のために尽くしてくれるよう、あなた方に促したことを切に願います<sup>33</sup>。

ミランダは、最も保守的なジャンルである建国の父祖の物語を、それが史実



とは異なる翻案だとしても、広大な初期アメリカ世界の多様なアメリカ人の物語として提示したのである。そこに描かれているのはまさに今日の研究者が再構成しようと試みてきた新しい建国の物語である。ここに見られるのは偶然の一致だろうか。ミュージカルへの熱狂的な支持は、今日のアメリカ社会で本当に求められている起源物語とはどのようなものであるべきかを示しているのではないだろうか。

## 註

1. 近年の包括的なサーヴェイの試みとして、以下の文献を参照。Woody Holton, "American Revolution and Early Republic," in *American History Now*, eds. Eric Foner and Lisa McGirr (Philadelphia: Temple University Press, 2011), 24-51.
2. Gordon S. Wood, "History in Context: The American Vision of Bernard Bailyn," *The Weekly Standard*, February 23, 2015, <https://www.weeklystandard.com/gordon-s-wood/history-in-context>.
3. Edward G. Gray and Jane Kamensky, eds., *The Oxford Handbook of the American Revolution* (New York: Oxford University Press, 2013), 5.
4. Josh Piker, "Getting Lost," *Uncommon Sense* (blog), January 21, 2016, <https://blog.oieahc.wm.edu/getting-lost/>.
5. Gordon S. Wood, "How the American Revolution Worked Against Blacks, Indians and Women," *The New York Times*, September 6, 2016, <https://www.nytimes.com/2016/09/11/books/review/alan-taylor-american-revolutions.html>. ここで取り上げられたテイラーの著作は、Alan Taylor, *American Revolutions: A Continental History, 1750-1804* (New York: W. W. Norton, 2016).
6. ちなみに、テイラーはこの号の巻頭エッセイの冒頭において、革命史研究の新動向に対する批判の一例としてウッドの2015年の書評に触れている。Alan Taylor, "Introduction: Expand or Die: The Revolution's New Empire," *WMQ*, 3<sup>rd</sup> ser., 74 (2017): 619 n.
7. 例えば、Michael D. Hattem, "Where have you gone, Gordon Wood?," *The Junto* (blog), January 21, 2013, <https://earlyamericanists.com/2013/01/21/where-have-you-gone-gordon-wood/>.
8. この過程に関する最も優れた解説として、Daniel T. Rodgers, "Republicanism: The Career of a Concept," *The Journal of American History* 79, no.1 (1992): 11-27 を参照のこと。日本語で書かれた論考として、岩淵祥子「共和主義と自由主義——アメリカ思想研究についての一考察」『北大法学論集』第45巻第3号(1994年): 185-208頁を挙げる。
9. Robert E. Shalhope, "Toward a Republican Synthesis: The Emergence of an Understanding of Republicanism in American Historiography," *WMQ*, 3<sup>rd</sup> ser., 29 (1972): 49-80; Gordon S. Wood,

*The Radicalism of the American Revolution* (New York: Knopf, 1992); Gordon S. Wood, "Rhetoric and Reality in the American Revolution," *WMQ*, 3<sup>rd</sup> ser., 23 (1966): 3-32.

<sup>10</sup> "Forum: How Revolutionary Was the Revolution? A Discussion of Gordon S. Wood's *The Radicalism of the American Revolution*," *WMQ*, 3<sup>rd</sup> ser., 51 (1994): 677-716 (ザッカーマンによる引用は 698) .

<sup>11</sup> "Forum: The Future of Early American History," *WMQ*, 3<sup>rd</sup> ser., 50 (1993): 298-424; Kathleen M. Brown, "Brave New Worlds: Women's and Gender History," *Ibid.*: 311-328.

<sup>12</sup> Daniel K. Richter, "Whose Indian History?," *WMQ*, 3<sup>rd</sup> ser., 50 (1993): 379-393.

<sup>13</sup> Richard White, *The Middle Ground: Indians, Empires, and Republics in the Great Lakes Region, 1650-1815* (New York: Cambridge University Press, 1991); Edward Countryman, "Indians, Colonial Order, and the Social Significance of the American Revolution," *WMQ*, 3<sup>rd</sup> ser., 53 (1996): 342-362; Alan Taylor, *American Colonies: The Settling of North America* (New York: Penguin, 2001); Daniel K. Richter, *Facing East from the Indian Country* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2001).

<sup>14</sup> Bernard Bailyn, *Atlantic History: Concept and Contours* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2005) (バーナード・ベイリン『アトランティック・ヒストリー』和田光弘・森丈夫訳(名古屋大学出版会、2007年)。巻末の解説も参照のこと); Bailyn, *The Peopling of British North America: An Introduction* (New York: Vintage Books, 1986); Bailyn, *Voyagers to the West: A Passage in the Peopling of America on the Eve of the Revolution* (New York: Vintage Books, 1986); Bailyn, *The Barbarous Years: The Peopling of British North America: The Conflict of Civilizations, 1600-1675* (New York: Vintage Books, 2012); David Armitage and Michael Braddick, eds., *The British Atlantic World, 1500-1800* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2002; 2009), 13.

<sup>15</sup> Bailyn, *Atlantic History*, 54.

<sup>16</sup> François Furstenberg, "The Significance of the Trans-Appalachian Frontier in Atlantic History," *American Historical Review* 113 (2008): 647-677; Claudio Saunt, "Go West: Mapping Early American Historiography" *WMQ*, 3<sup>rd</sup> ser., 65 (2008): 745-778; White, *The Middle Ground*; Alan Taylor, *The Divided Ground: Indians, Settlers, and the Northern Borderland of the American Revolution* (New York: Knopf, 2006); Eric Hinderaker, *Elusive Empires: Constructing Colonialism in the Ohio Valley, 1673-1800* (New York: Cambridge University Press, 1997); Kathleen DuVal, *The Native Ground: Indians and Colonists in the Heart of the Continent* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2006); Pekka Hamalainen, *The Comanche Empire* (New Haven: Yale University Press, 2008).

<sup>17</sup> Karin Wulf, "For 2016, Appreciating #VastEarlyAmerica," *Uncommon Sense* (blog), January 4, 2016, <https://blog.oieahc.wm.edu/for-2016-appreciating-vastearlyamerica/>; Wulf, "Must Early America be Vast?," *Uncommon Sense* (blog), May 2, 2019, <https://blog.oieahc.wm.edu/must-early-america-be-vast/>; Wulf, "Vast Early America: Three Simple Words for a Complex Reality," *Humanities* 40, no. 1 (2019), <https://www.neh.gov/article/vast-early-america>.

<sup>18</sup> David Waldstreicher, "The Revolutions of Revolution Historiography: Cold War Contradance, Neo-Imperial Waltz, or Jazz Standard?," *Reviews in American History* 42 (2014): 23-35; Michael A. McDonnell and David Waldstreicher, "Revolution in the *Quarterly*?: A Historiographical

Analysis," *WMQ*, 3<sup>rd</sup> ser., 74 (2017): 633-666.

<sup>19</sup> Karin Wulf, "#VastEarlyAmerica and Origins Stories: *WMQ* 1:1." *Uncommon Sense* (blog), February 22, 2016, <https://blog.oieahc.wm.edu/vastearlyamerica-origins-stories-wmq-11/>.

<sup>20</sup> Alan Gibson, *Interpreting the Founding: Guide to the Enduring Debates over the Origins and Foundations of the American Republic* (Lawrence: University Press of Kansas, 2006); Alfred Young and Gregory Noble, *Whose American Revolution Was It?: Historians Interpret the Founding* (New York: New York University Press, 2011).

<sup>21</sup> David Waldstreicher, Jeffrey L. Pasley, and Andrew W. Robertson, "Introduction," in *Beyond The Founders: New Approaches to the History of the Early American Republic*, eds. Pasley, Robertson, and Waldstreicher (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2004), 1-30. 今日でも狭義の政治史や政治思想史はロースクールの憲政史研究者や行政学部の政治理論（政治思想）研究者によって営々と成果が挙げられているが、本稿では取り上げていない。近年の政治思想史の重要な著作として、Eric Nelson, *The Royalist Revolution: Monarchy and the American Founding* (Cambridge, Mass.: Belknap Press, 2017) を挙げるにとどめる。

<sup>22</sup> *Beyond the Founders* 所収の諸論文を参照。また、David Waldstreicher, *In the Midst of the Perpetual Fetes: The Making of American Nationalism, 1776-1820* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1997); Simon P. Newman, *Parades and the Politics of the Street: Festive Culture in the Early American Republic* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1997); Joanne B. Freeman, *Affairs of Honor: National Politics in the New Republic* (New Haven: Yale University Press, 2002); Nicole Eustas, *Passion is the Gale: Emotion, Power, and the Coming of the American Revolution* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2008); Sarah Knott, *Sensibility and the American Revolution* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2009); Laurel Thatcher Ulrich, *The Age of Homespun: Objects and Stories in the Creation of an American Myth* (New York: Vintage Book, 2002); T. H. Breen, *The Marketplace of Revolution: How Consumer Politics Shaped American Independence* (New York: Oxford University Press, 2004).

<sup>23</sup> Woody Holton, *Forced Founders: Indians, Debtors, Slaves, and the Making of the American Revolution in Virginia* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1999).

<sup>24</sup> Carol Berkin, *Revolutionary Mothers: Women in the Struggle for America's Independence* (New York: Knopf, 2005); Rosemary Zagarrri, *Revolutionary Backlash: Women and Politics in the Early American Republic* (Philadelphia: University of Pennsylvania, 2007).

<sup>25</sup> Ira Berlin, *Many Thousands Gone: The First Two Centuries of Slavery in North America* (Cambridge, Mass.: Belknap Press, 1998) (増補版の邦訳が、アイラ・バーリン『アメリカの奴隷制と黒人——五世代にわたる捕囚の歴史』落合明子ほか訳(明石書店, 2007年)); Gary B. Nash, *The Forgotten Fifth: African Americans in the Age of Revolution* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1998); Holton, *Forced Founders*; Alan Taylor, *The Internal Enemy: Slavery and War in Virginia, 1772-1832* (New York: W. W. Norton, 2014).

<sup>26</sup> Collin Calloway, *The American Revolution in Indian Country: Crisis and Diversity in Native American Communities* (New York: Cambridge University Press, 1995); Patrick Griffin, *American Leviathan: Empire, Nation, and Revolutionary Frontier* (New York: Hill and Wang, 2007); Kathleen

DuVal, *Independence Lost: Lives on the Edge of the American Revolution* (New York: Random House, 2015); Claudio Saunt, *West of the Revolution: An Uncommon History of 1776* (New York: W. W. Norton, 2014).

<sup>27</sup> Sarah Knott, "Narrating the Age of Revolution," *WMQ*, 3<sup>rd</sup> ser., 73 (2016): 3-36; Eliga Gould, "Entangled Histories, Entangled Worlds: The English-Speaking Atlantic as a Spanish Periphery," *American Historical Review* 112 (2007): 764-786; David Armitage and Sanjay Subrahmanyam, eds., *The Age of Revolution in Global Context c. 1760-1840* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010); Wim Klooster, *Revolutions in the Atlantic World: A Comparative History* (New York: NYU Press, 2009; 2018); Peter Linebaugh and Marcus Rediker, *The Many-headed Hydra: Sailors, Slaves, Commoners, and the Hidden History of the Revolutionary Atlantic* (London: Verso, 2000); Lynn Hunt, *Inventing Human Rights: A History* (New York: W. W. Norton, 2007) (リン・ハント『人権を創造する』松浦義弘訳(岩波書店, 2011年)); Jonathan Israel, *The Expanding Blaze: How the American Revolution Ignited the World, 1775-1848* (Princeton: Princeton University Press, 2017); R. R. Palmer, *The Age of the Democratic Revolutions: A Political History of Europe and America, 1760-1800*, with new foreword by David Armitage (Princeton: Princeton University Press, 1959-1964; 2014); Robin Blackburn, "Haiti, Slavery, and the Age of the Democratic Revolution," *WMQ*, 3<sup>rd</sup> ser., 63 (2006): 633-674; Laurent Dubois, *A Colony of Citizens: Revolution and Slave Emancipation in the French Caribbean, 1787-1804* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2004); Ada Ferrer, *Freedom's Mirror: Cuba and Haiti in the Age of Revolution* (New York: Cambridge University Press, 2014).

<sup>28</sup> David Armitage, *The Declaration of Independence: A Global History* (Cambridge Mass., Harvard University Press, 2007) (デイヴィッド・アーミテージ『独立宣言の世界史』平田雅博ほか訳(ミネルヴァ書房, 2012年)); Eliga H. Gould, *Among the Powers of the Earth: The American Revolution and the Making of a New World Empire* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2012) (イリジャ・H・ゲールド『アメリカ帝国の胎動——ヨーロッパ国際秩序とアメリカ独立』森丈夫監訳(彩流社, 2016年).

<sup>29</sup> Patrick Spero and Michael Zuckerman, eds., *The American Revolution Reborn* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2016); Maya Jasanoff, *Liberty's Exiles: American Loyalists in the Revolutionary World* (New York: Vintage Books, 2012); David Armitage, *Civil Wars: A History in Ideas* (New York: Vintage Books, 2017) (デイヴィッド・アーミテージ『内戦の世界史』平田雅博ほか訳(岩波書店, 2019年)).

<sup>30</sup> Holger Hooke, *Scars of Independence: America's Violent Birth* (New York: Crown Publishing, 2017); Griffin, *American Leviathan*; Taylor, *American Revolutions*.

<sup>31</sup> David Waldstreicher, "Founders Chic as Culture War," *Radical History Review* 84 (2002): 185-194; Francis D. Cogliano, "Founders Chic," *History* 90 (2005): 411-419.

<sup>32</sup> Woody Holton, *Abigail Adams: A Life* (New York: Free Press, 2009); Annett Gordon-Reed, *The Hemingses of Monticello: An American Family* (New York: W. W. Norton, 2008).

<sup>33</sup> Eric Bradner, "Pence: 'I wasn't offended' by message of 'Hamilton' cast," CNN, November 20, 2016, <https://web.archive.org/web/20161121020214/http://www.cnn.com/2016/11/20/politics/mike-pence-hamilton-message-trump/>.